令和４年度独立行政法人福祉医療機構助成
ひきこもり・困窮者の「居場所支援」支援と
人材育成・情報発信事業
事業報告書

令和５年３月

社会福祉法人　千楽

目　次

目次

第１．　はじめに　－　個人化をこえる連帯するための場 1

第２．　本事業の実施に当たって 2

１．　事業実施の背景 2

(1)　地域の課題とニーズ 2

(2)　当法人が取り組む理由 2

２．　事業の概要 3

(1)　事業概要 3

(2)　事業の柱立てと実施内容 3

第３．　本事業の取組内容と成果 5

１．　困窮者の「居場所カフェ」 5

(1)　課題設定 5

(2)　成果と事例 5

２．　アウトリーチ・伴走型支援 12

(1)　課題設定 12

(2)成果と事例 12

３．　シェルターとレスパイト事業 14

(1)　課題設定 14

(2)成果と事例 14

4.啓発イベント付き出前相談 15

(1)　課題設定 15

(2)　成果と事例 16

５．「こもリズム研究会」による文化創出 16

(1)　課題設定 16

(2)　成果と事例 17

６．学生ボランティア・スタッフ育成 18

(1)　課題設定 18

(2)　成果と事例 18

第４．　今年度成果に対する自己評価及び今後の課題 20

１．　自己評価 20

(1)　困窮者の居場所カフェ 20

(2)　アウトリーチ・伴走型支援 20

(3)　シェルター（緊急避難場所）とレスパイト事業 20

(4)　啓発イベント付き出前相談 21

(5)　「こもリズム研究会」による文化創出 35

(6)　人材育成 35

第５．　あとがき 44

第１．はじめに　-　個人化をこえる連帯するための場

1995(平成 7)年の社会保障制度審議会の勧告では、戦後の日本の社会保障制度を総括し、変貌する日本社会を見据え 21 世紀の日本社会への危惧が述べられている。戦後からわが国が構築してきた社会福祉制度によって、国民は豊かになり、健康状態が改善して長寿化を実現できた。一方で、その過程で生み出された高齢化や少子化に対して、社会保障制度が十分に追いついていないことを指摘している。中でも戦後の日本で進んだ個人主義について、個人主義や個人化は日本社会の進展として歓迎すべきであるが、社会的連関が個人化と同時に形成されないと社会は解体すると警告している。

2000 年代には介護保険法、障害者総合支援法などが整備されたことで、高齢者や障害者が地域で住み続けるサービスは格段に整ってきた。しかし、誰もが住み慣れた街に住み続けられる地域を築くためには、政策やサービスに加えて、市民の生活レベルをきめ細かに支援する市民相互の支援体制が欠かせない。

一方で、仕事を求めて多様な地域から集まってできている都市近郊の地域では、先の審議会の指摘のように住民の個人化が進み、地域関係より企業との関係が重視されている。

地域は家庭生活の部分に留まり、子育ての通過地点として色合いが濃い。そうした環境において地域の連帯を求めても多くの市民が必要性の認識はするものの具体的な地域連帯を構築する行動を起こせていない状況にある。

本事業では、地域の人々が集まり、交流できる「場」を設け、社会福祉法人が主体となって地域で困っている人や取り残された人に関わり、課題を共に考えることに取り組んだ。また、地域の人々の交流の場や一時避難する場を地域で事業を行う社会福祉法人が運営することで、地域の新たな紐帯の構築を試みたものである。こうした取り組みが、地域市民に認知され都市近郊地域の新たな社会連帯、21 世紀型の「コモンズ」の形成に資することを期待している。

最後に本事業を理解し、支援してくださった独立行政法人医療福祉機構に感謝し、この報告書が本事業に携わった地域の方々と地域の未来に役立てれば幸いである。

社会福祉法人 千楽
理事長　岸田宏司

第２. 本事業の実施に当たって

１. 事業実施の背景

(1) 地域の課題とニーズ

新設マンションの多い都市部特有の問題として、隣近所の助け合い機能の弱さ、高齢化が急速に進む中で孤立する困窮者の広がりが見られる。知的・発達障害者による小さなトラブルへの不寛容さ、福祉事業所の力不足もあり、重度障害者の地域生活は進んでいない。

当法人は知的障害者を中心に生活介護、就労継続支援 B 型、放課後等デイサービスなどを運営し、他事業所から敬遠される重度障害者についても積極的に受け入れてきた。昨年度からショートステイ、移動支援事業を始め、行動援護従事者研修も開催して人材育成に努めている。

学齢期を過ぎた発達障害者の支援機関が無かったため、令和２年度には発達障害者支援センター・ミッテを開設した。発達障害の相談以外にも DV 被害、貧困、認知症と介護者の失業、ひきこもりなど多重困難の相談ケースが持ち込まれている。コロナ禍の影響もあり、制度の隙間で困窮者が急増している実態が見えてきた。

現状のスタッフだけでは対応し切れないため、令和３年度に WAM 助成を受けて、ひきこもり支援や人材育成、地域のネットワークづくりなどに取り組んだ。困窮者の掘り起こしは短期間では限界があるものの、七つの市民グループと新たに連携ができ、多数の大学生ボランティアも活動に参加している。当法人の取り組みが関係機関から認知され、困難ケースがさらに持ち込まれるようになった。コロナ禍の長期化に伴って独居の高齢者や困窮者の孤立状態は深刻化し、ヤングケアラー、ひきこもり親和群の増加など新たな課題も次々と持ち上がっている。

(2) 当法人が取り組む理由

国の福祉予算が増えるにつれて収益目的の営利団体が広く事業展開するようになり、支援の難しい利用者は一部の福祉事業所に集中する傾向が見られる。自傷他害などの行動障害や近隣とトラブルになる障害者、制度の隙間の困窮者への支援には多くの時間と専門的なスキルが必要だが、当法人は夜間や休日の緊急時にもこうした困難事例に対応してきた。職員全体のスキルアップは着実に図られており、理念や実践に共鳴した有資格者の転入や大学生のボランティア・アルバイトも増えている。行政や

地元の関係機関とのネットワークの構築も進んでおり、上記課題に取り組む体制は整ってきている。

コロナ不況の財政難や支援機関の不在を理由に浦安市はひきこもり相談（市単独事業）を廃止することを検討していた。当法人との協議を重ねる中で、新年度から当法人がひきこもり相談や就労準備を受託することを申し出たことで、事業継続を決めるに至った。

ただ、市からの来年度予算ではスタッフ１人分の経費しか賄うことできず、必要な活動を継続することはできない。コロナ禍で広がっている困窮者やひきこもりの支援にはこれまで以上に多くのスタッフを養成して投入し、地域の市民団体・ボランティア団体と連携していかねばならない。令和３年度の WAM 助成事業によってできた土台をさらに強固なものにし、困窮者の居場所支援など必要な事業をするのはこれからだ。市内には制度の隙間の支援を担う事業所がほとんどなく、当法人がハブ機能を果たすことが行政や関係機関からも期待されている。

２.事業の概要

(1) 事業概要

ひきこもり・困窮者が孤立することなく安心して暮らせる地域づくりをすることを目的に、当事者や支援者・地域住民が集うことのできる「居場所」を作り、大学生などが福祉を学びながら困窮者支援も行う自律的な活動団体の組織化、ひきこもりをネガティブに見るだけではなく新しい意味を見出すことを目指した「こもリズム」文化の創造、ネットや出版を通した情報発信などを行う事業である。

実施にあたっては、大学生などの若い世代にボランティアとして活動に参加してもらうと同時に、次世代の担い手としての育成も行う。

(2) 事業の柱立てと実施内容

① 困窮者等の「居場所カフェ」

既存の福祉サービスでは対応の難しい、生きづらさを抱えた市民の受け皿となる居場所を立ち上げる。当事者と支援者の枠を超えた交流の場としても育て上げていく。

②アウトリーチ・伴走型支援

ひきこもりや複合的な困窮状態にあるある人の電話相談・アウトリーチを行う。実務経験豊富な有識者を交え、福祉専門職だけでなく、若手のスタッフも関わりながらの支援を展開する。

③　シェルター（緊急避難場所）とレスパイト事業

昨年度の補助金事業で運営していた賃貸物件を今年度は法人自前で借り上げる。虐待やDV、近隣とのトラブルなどから、自宅にいられなくなった人を保護するシェルターとしての役割、また障害者や高齢者を介護・養育している家族が疲弊のストレスを和らげ、息抜きできる場としてレスパイト事業も行う。

④　啓発イベント付き出前相談

直接的には福祉に関わりのない一般市民に福祉的な課題を知ってもらうために、幅広く市民向けのイベントを開催する。福祉事業所がほとんどない臨海地域の高洲地区と、福祉教育ゾーンの中心である東野パティオで実施し、市民の啓発に努める。

⑤　「こもリズム研究会」による文化創出

ひきこもりを過度にネガティブに見る風潮が本人や家族を追い詰め、隠そうとする心理から潜在化させている。ひきこもり、依存症、いじめ被害者らの作品（文章、絵画）には人間や社会に対する繊細な感性が滲んだ独創的な秀作がある。こうした作品を募り、「こもれび文庫」として新聞や月刊誌、ネットで紹介あるいは冊子にまとめる。ひきこもりの本人や家族のエンパワーメント、一般市民への啓発に寄与する文化活動を展開する。

⑥　学生ボランティア・スタッフ育成

大学生を中心に発達障害、ひきこもり、生活困窮等の実情と基本的知識を知り、支援スタッフとして活動できるよう実践的スキルの獲得を図る。東京大学、上智大学、千葉大学、植草学園大学、和洋女子大学などの学生たちにアルバイト・ボランティアとして参加を募る。座学と実践によりひきこもりや発達障害の人を支援できるように育成する。

⑦　報告書制作

事業成果の周知、PRのため

第３．本事業の取組内容と成果

１．困窮者の「居場所カフェ」

(1) 課題設定

生活困窮者・ひきこもりや不登校の家族・ヤングケアラーの当事者などが集い、就労や社会参加に向けた活動のできる「カフェ」を浦安市内に設置する。

困窮者だけでなく、市民団体やボランティア・大学生らの活動の場や交流の場とする。一般市民にも開放し、啓発や情報発信にも努める。カフェの運営には発達障害や困窮者の当事者も関わることができるようにし、就労に向けた支援の場として発展を目指す。場所は浦安市内に新規賃貸物件を確保する。当初は週末からの運用を開始し、徐々に平日の運用へも展開していく。

この事業を行う背景としては、「地域活動支援センターⅠ型（浦安市発達障がい者等地域活動支援センターミッテ）」、「日中一時支援事業」、「放課後等デイサービス」、「ひきこもり相談」等の当法人が本業で運営している事業では対応しきれない市民のニーズが多いという実情がある。障害があっても障害福祉サービスを利用することには躊躇するケース。障害福祉サービスを利用はしたいのだが、本人が求めるサービスではないケース。営業時間、営業日が本人のニーズに合っていないケース。傍から見るとわずかなニーズのずれに見えるかもしれないが、当事者にとってはこのニーズが満たされないために社会参加のきっかけを逸しているケースが数多くある現状を当法人では目の当たりにしてきた。

ニーズが満たされない当事者がいる一方で、ボランティアとして福祉的な課題解決に関わりたいという市民も数多くいることを認識している。コロナ禍において様々な活動が制約されてきたが、この間ボランティア活動については活動場所がないという致命的な制約を受けてきた。いずれはコロナが収束することを見据えて、「居場所カフェ」が既存のボランティア団体、あるいはこれからボランティアに関わってみたいという市民にとっての情報交換、懇親を深める場として機能していくことを当初の目的として掲げた。

なおこの居場所カフェを「Leap（リープ）」と名付けた。Leap とは跳躍を意味する。大江健三郎の「見るまえに跳べ」という小説作品があるのだが、英訳タイトルが“Leap before you look”であり、ここから引用させてもらい名付けてものである。

(2) 成果と事例

賃貸物件は浦安市役所から徒歩５分という市内中心部に確保し、使用方法と

しては、主に５つのテーマで使用した。

一つ目は、発達障がい者等地域活動支援センターに寄せられた相談者で、居場所のない中学生の当事者たちの活動場所としての利用である。このケースについては当事者の中学生たちだけでなく、その親（主に母親）たちについても日頃の悩みごとなどをスタッフが聞き取るところからスタートし、母親たちの憩いの場として活用してもらった。

二つ目は、既存のサービスを受けている当事者が、既存のサービスではカバーできない内容をこの居場所カフェで提供するというケースである。

三つ目は、浦安市から委託を受けているひきこもり相談の週２回の営業日以外の補完的な役割として使用である。

四つ目は、発達障害と生活困窮という複合的な課題を抱えた当事者の支援のための利用ケースである。このケースの場合は、発達障がい者等地域活動支援センターミッテに登録している利用者が複数含まれる。特徴としては発達障害ゆえの人間関係の構築の困難さがあり、センターに通うことが非常に難しいことがある。そして浦安では生活保護を受給しながら一人暮らしをしており、頼れる人が全くいないという孤立状況にある。

五つ目は、地域の関係者が集う意見交換の場所としての利用である。

本事業の成果事例として、以下に具体的なケースを挙げる。

１－①当事者の中学生とその親への支援

日時：2022 年 8 月 22 日　11:00～12:45

参加者数：６名

<概要>

別添チラシを作成し、発達障がいの特性から集団・音などでストレスが過大となり放課後の時間に日中一時や放課後等デイサービスに通うことができない発達障がい当事者の中学生 3 名とその母親にメハルで千楽のスタッフ 2 名と一緒に昼食を食べながら過ごす。千楽のスタッフと知り合うことで母親と当事者双方の相談者として認識されることと、短期入所や移動支援のサービスの紹介を目的とした。

<会の様子>

食事は母親 3 名が近隣のレストランにてテイクアウトで購入されたものを持参。緊張気味ではあったが、すぐに慣れてリラックスして過ごしていた。母親にはスタッフから千楽の各サービスの説明をしたところ、短期入所は特に利用希望を受けた。

<まとめ>

今回参加された 3 名の当事者のうち 2 名は支援級に通級できている。1 名は発達障がいの特性から、母親が学校でも一緒に過ごす必要がある方である。この 3 名は放課後等デイサービスや日中一時支援の利用が本人らの特性により難しく、母親のレスパイトが必要であるにもかかわらず福祉サービスの利用ができていない結果、母親が本人と一緒にいる時間が多くなっている。双方のストレスから口論や当事者が母親に物を投げるなどがある。このため集団で過ごす必要のない千楽の短期入所やマンツーマンでの移動支援のサービスに関心があり、短期入所については早速利用を希望したい旨を受けた。

1－②当事者の中学生とその親への支援

日時：2022 年 9 月 25 日 11:00～14:00

場所：こもラボ

参加者数：6 名

<概要>

8 月にアウトリーチ活動として実施した参加者 6 名と一緒に昼食とおやつを作る回を設けた。前回にメハル（短期入所事業所）の見学をしたこと、こもラボをシェルター機能やひきこもり相談支援の事業所として活用していることの紹介をする機会とした。

<会の様子>

食事は母親 3 名から材料とホットプレートを持参してもらい、焼きそばとホットケーキをスタッフと母親と一緒に作る。当事者 3 名は携帯ゲームなどして過ごしながら、時折調理を手伝っていた。

8 月の会は当事者 3 名はスタッフとのコミュニケーションは多少警戒感があったが、1 度会っていることで 2 回目の今回は緊張感が和らいでいて、スタッフが話しかけると少しずつだが応対していた。

1 名の当事者は競馬の情報を集めることが好きで、スタッフと趣味が一緒だったため、競馬の話題で少し話すことができた。1 名の当事者は他人や音が苦手な様子でイヤーマフをしてスタッフとの交流も難しい様子だったが過ごしているが、最後の感想で次はたこ焼きを作りたいと話されていた。

<まとめ>

前回実施した参加者で再度実施したことで、参加者とスタッフとは前回よりは打ち解けてきていた。こもラボを紹介することで、母親 3 名には社会資源の紹介の機会となり、また、千楽のスタッフが相談できる社会資源であることも認識が深まっている様子だった。前回、今回と同じ参加者で行ったことで、「これまで相談できる福祉の人材と繋がっていなかった」方へのアウトリーチの意義は

達成されてきている。

１－③当事者の中学生とその親への支援
日時：2023 年 1 月 29 日 12:00-16:00
参加者数：9 名
<概要>
8 月及び 9 月に実施した活動に参加いただいた発達障がい中学生当事者 3 名と、それぞれの母親、及びこの母親が今回参加を促した当事者 2 名とうち 1 名の母親が参加。スタッフと一緒にチョコレートを溶かしてキャラクターの型に入れて冷やして、チョコレートを作った。
<会の様子>
すでに複数回、この会に参加している中学生 3 名とその母親に加え、今回初めて参加する発達障がい中学生当事者 2 名と、うち 1 名の母親が新たに参加した。新たに参加した当事者 2 名は他者とのコミュニケーションは苦手ではない様子だったが、緊張していた。
中学生 5 名は同じクラスとのことで、子ども同士は緊張感も無くコミュニケーションを展開していた。
すでに数回参加している母親から、今回上記新たにお勧めした方に加え、さらにもう 1 名、最近不登校になってしまった方に参加してほしかったとのことで、その方と母親が来れなかったことを残念に話していた。その方は不登校になったことで、母親が精神的に疲弊しており、ラインをしても既読になるが返答が無い状態で心配しているとのことであった。
子育て経験のある女性スタッフが今回 2 回目の参加で、前回母親同士として相談に乗っていたことから、今回もその女性スタッフとお母様方でお話をしている時間が多くあった。子育て経験のある女性スタッフの存在が、参加した母親にとってはありがたい様子が見られる。
競馬好きな中学生が、他の参加者 2 名を連れて競馬場に行きたいとのことで、2 月 26 日に男性スタッフが引率して中山競馬場に観戦に行くこととした。この 2 名も行きたいとのことで、スタッフ 2 名でアウトリーチ活動として企画することとした。
<まとめ>
今回、母親 1 名から新たに呼びたいとの話を受けて、参加者が増えた。この母親としてはこのような活動の継続を希望していることと、同じクラスで疲弊している母親や、当事者もこのようなサークル的活動であれば他者との交流が取れる方がいるとのことで、そのような方にも参加してもらい、会を継続していきたいと要望を受けた。

この母親の思いを聴いて、この居場所活動の新たな目論見としてきた、「母親と当事者と支援者が参加する活動を通した、発達障がい当事者の交流場面の創出と、同活動が自立して母親が運営主体となっていくこと」が芽として出てきたと考える。

来年度はリープなど場所の提供は千楽として協力できることは行うとして、会の運営を母親主導にして、支援者はバックアップしていくことを計画していく。

2．複合的な課題を抱えた当事者への支援

日時：2022 年 12 月 30 日 13:00～16:00

日時：2023 年 1 月 2 日 13:00～16:00

参加者数：3 名

<概要>

当法人の利用登録者でありながら来所が難しい方 2 名と、通所できているがリストカットなど自傷行為がある方 1 名が参加。全員一人暮らしで生活保護あるいは無職でかろうじて貯蓄で暮らしていること及び実家に帰ることが事情により無いことなど共通している 3 名に「年末年始サロン」として、事業所の営業が無い年末年始も居場所として「支援者と話す時間」を設けることを目的とした。

<会の様子>

それぞれ話したいことを他の利用者とスタッフで話して過ごす。1 名はディズニーランドで働いていた経歴があり、そこでうまくいかないことなど話をされていた。参加者はおおむね人間関係の難しさを話していることが多く、他責となる表現も多々あるが、最後は不安感が大きいためにそのような表現になることも話されていた。

<まとめ>

今回参加してもらった 1 名の方は、年末年始で事業所が利用できない期間になると気持ちが不安定になり、中核地域生活支援センターがじゅまるなどに電話して不安感を傾聴してもらうことがあったため、年末年始に支援者と顔を合わす機会があることで、精神的に安定できるかどうかを試行することとした。結果的にはこの効果はあり、12 月 30 日と 1 月 2 日にサロンを開くことで、ミッテの最終営業日から年始の営業開始日までの期間で 3 日以上間を空けずに支援者や他の利用者と話せる機会があったことで、上記の方や 2 名の方も気持ちが落ち着いて過ごせたとの感想があった。

3．地域の関係者が集う意見交換の場

2022 年 12 月 20 日

参加者：スマイルこども食堂浦安代表、NPO スマイルー（多世代交流団体）代表、NPO スマイルー副代表、境川にこいのぼりを泳がせる会代表、ルフラン代表、明海大学ハニープロジェクト学生 2 名、浦安市社会福祉協議会職員 2 名、浦安市役所高齢部署 1 名、浦安市役所こども部署 1 名

<概要>

当法人とこれまで個別に関わりのある市民団体、大学生、行政等の関係者に一堂に会してもらった。コロナ禍において市民団体は活動場所に大きな制約を受けていた。当法人では感染対策を万全に施せる発達障がい者等地域活動支援センターミッテにおいてプログラムなどにおいてボランティアの受け入れは中断することなく行っていた。それぞれの団体の当法人での活動は以下の通り。

①スマイルこども食堂浦安

毎月２回浦安市発達障がい者等地域活動支援センターミッテの事業所のある建物内でこども食堂を運営している団体である。ミッテの利用者の中には就労を希望している方がいるもののハードルが高く踏み出すのが難しい方が複数いる。そのような利用者をスマイルこども食堂浦安の活動で受け入れてもらっている。一方ではミッテでは週に１回プログラムで畑活動があるのだが、こども食堂の代表者が畑活動に毎回ボランティアで参加してくれて利用者との交流を行ってくれている。

②NPO スマイルー

多世代交流、居場所づくりを浦安市を中心に取り組んでいる団体である。ミッテとの関りは、女性目線の発達障がい者向けのプログラムの導入を検討していたところ、繋がりを持つことができた。月に１回のスマイルー主催で写真、アロマ、石鹸づくり、ネイルアート、お菓子作りなどの内容でボランティア講師としてプログラムを提供してもらっている。他には畑作業の堆肥作りのために手作りのコンポストを設置してくれたり、新設（令和２年６月オープン）で殺風景だった事業所内の飾りつけ、ドライフラワー、利用者作品の展示、職員紹介写真の貼り付け等、様々な場面で NPO スマイルーのメンバーの皆さんの支援を受けている。

③境川にこいのぼりを泳がせる会

家庭で不要になったこいのぼりの寄付を受け、そのこいのぼりを市内を流れる境川に３００尾以上渡すというイベントを 1994 年から行っている団体である。ミッテが事業所外での活動を探していたところ繋がることができた。当初は GW 前に川にこいのぼりを渡すためだけの活動であったが、1 年を通じて一緒に活動が出来ないかを模索していたところ、利用できなくなったこいのぼりの再利用でエコバックをミッテのプログラムとして作成することとなる。

④ルフラン

人形劇、読み聞かせ、紙芝居、うた、手遊びなどで子供から大人まで一緒に楽しめる活動を提供する団体で、浦安市を中心に活動。ミッテの利用者向けの表現プログラムを月に１回受け持っている。

⑤うらやすハニープロジェクト

明海大学（浦安市）ホスピタリティ・ツーリズム学部学生が行う養蜂プロジェクト。浦安キャンパス屋上で都市型養蜂を行い、巣箱の管理や蜂の飼育、採れたはちみつの販売や関連商品の製造・商品化といった活動全てを学生が担う団体。ハニープロジェクトが生産したハチミツを千楽の行事（ひきこもり相談が主催したガレージセール）で飲み物（ハチミツレモン）の提供で使わせてもらった。学生たちとは浦安市内で学生と福祉が協働してして何が出来るかをオンライン、対面での会議を重ねてきた。

<会の様子>

一堂に会するのは初めてであったが、市内で活躍しているお互いの団体のことは各々知っていて、自己紹介後の名刺交換では早速それぞれの団体がどのような形で具体的に連携できるかという話で盛り上がっていた。

<まとめ＞

この集まりがきっかけに令和４年度中に連携が具体化したケース

①ミッテ×スマイルーフェスへの協力

2022 年の夏に当法人が主催、共催と形で他団体が参加してくれたが、今回は当法人ではなく、スマイルーが主導での地域向けの行事を開催することができた。

2023 年 2 月 25 日㈯にミッテが入っている市の建物（東野パティオ）で行事を開催する。子供から大人が楽しめるワークショップや物販が中心の催し物で、境川にこいのぼりを泳がせる会は、不要こいのぼりで作成したエコバックの展示、うらやすハニープロジェクトはハチミツの販売を行い、その活動を多くの市民にアピールすることができた。

②浦安市社会福祉協議会の独居老人への弁当配達の協力

浦安市社会福祉協議会ボランティアセンターが週に 1 回行っている弁当配達に、当法人の生活介護の知的障害者の利用者がスタッフと共にボランティア登録し、独居老人への弁当配達を行うこととなった。重度の知的障害者が地域の独居老人の見守りに関われるようになった。

③境川にこいのぼりを泳がせる会とスマイルーの連携

境川にこいのぼりを泳がせる会の 30 周年を記念して浦安市役所１階市民ホールで開催された記念展示会をスマイルーが全面的にバックアップする。

④スマイルーとうらやすハニープロジェクトの連携

明海大学浦安キャンパスで行っている養蜂活動にスマイルーのメンバーが参

加、学生と市民の協働が開始される。学生が不得手とする情報発信について今後スマイルーが関わっていけるかどうかを模索中である。

⑤スマイルこども食堂浦安との連携

ここに集ったメンバーは、生きづらさを抱えた市民にどのようにアプローチしていくかという課題を共有している。何らかの障害を抱えているケースは当法人に直接相談が来るようになっただけでなく、必ずしも障害が関係しているわけではないケースはスマイルこども食堂浦安の高嶋賢一代表へ相談がいくケースが複数ある。子供の学び場であったり、シングルマザーの相談などを高嶋氏が受けるケースがある。子供の学びの場としては、スマイルこども食堂浦安がNTTからパソコンの寄贈を受けて、子供向けのパソコン教室の取り組みを開始した。このパソコン教室に、発達障がい者地域活動支援センターミッテのパソコンが得意な利用者がボランティアとして子供にパソコンを教えるという場面を設定してもらうという連携の具体例もあった。高嶋代表はNTTの方を当法人に紹介してくれて、NTTの社会貢献として当法人千楽へのパソコンの寄贈を検討したいということ、発達障害を持つ当事者が就労するにあたっての課題を一緒に共有していきたいと申し出をしてくれている。

2.アウトリーチ・伴走型支援

(1) 課題設定

令和２年度から浦安市より業務委託された浦安市発達障がい者等地域活動支援センターの運営と、令和３年度の WAM 補助金事業『シェルター付き伴走型支援と「引きこもり文化」創出事業』の成果が評価された結果、令和４年度より浦安市から「ひきこもり相談・就労準備支援」事業を受託することとなった。

ひきこもり・困窮状態にある人の相談と支援に取り組む。浦安市ひきこもり相談・就労準備事業が週２日であることから、それ以外の日のひきこもり相談・一般的な困窮者相談とアウトリーチを当法人独自事業として行う。定期的なケース会議を重ね、アウトリーチ型伴走支援のできるスタッフの養成を行う。

⑵成果と事例

浦安市からの受託事業である「ひきこもり相談」事業は週に２回水曜日と土曜日の開業であり、それ以外のに日について学生アルバイトを中心に相談を受けられる体制を整えた。人材育成の柱とも連動してくるがスタッフには支援にあたって重要となる、利用者個々の特性・課題について障がい種別に沿ってレクチャーをした。

柱１の「居場所カフェ」の支援と重なり合う部分もあるが、複合的な課題を抱

えた当事者への支援ということで伴走型支援の対象となったケースが複数ある。既存の福祉サービスでは利用者同士の人間関係でつまずき事業所に通うことが出来なくなり、伴走型支援で支えてきた。

また「福祉」「障害」というワードに拒否感から福祉サービスの支援が難しく、今事業において支援に取り組んだというケースもあった。

以下に中学生の発達障害当事者に外出支援に取り組んだ事例を紹介する。

日時：2022 年 12 月 18 日 11:00～18:00
場所：外出（中山競馬場）
参加者数：1 名
<概要>

複数回居場所カフェの活動に参加した発達障害中学生当事者 1 名と「家族以外と初めて外出」の機会を設けることとした。

<会の様子>

競馬の情報を集めることが好きな当事者と、中山競馬場で観戦する。家族以外との外出は初めてだったが、往復の電車と競馬場での過ごし方も全く問題無かった。むしろ、見やすい場所を知っていて、確かにその場所は観戦しやすい場所であったことなど、本人が情報収集をしっかりして臨んでいたことが分かり、計画的であった。長澤とは 3 回、活動で会っていたり、前回の会では一緒にラジオで競馬を視聴するなどして交流があったこともあり、緊張感は全く感じられなかった。

<まとめ>

この当事者は競馬の情報収集が好きである一方、普段自宅では YouTube の動画視聴以外に特に趣味は無いとのことだった。学校生活は支援級に通級して問題なく通えているとのことだが、日中一時や放課後等デイサービスは人混みが苦手とのことで利用を拒んでいる。このため学校から帰ると自宅で過ごしている毎日で、人との交流の機会があまりないことを母親は心配している。しかし実際にスタッフと交流して競馬場で過ごすことも難なくできていたため、母親の子に対する見立てを母親自身が客観視する機会を増やす必要を考えた。この取り組みはアウトリーチ事業の拡大版である外出支援事業であったが、この外出が提供できたことで本人の自信が深まったこと、母親が我が子の強みを実感できたことは意義深かった。

※この外出は競馬場見学のみでスタッフは馬券購入はしていない。

３. シェルターとレスパイト事業

(1) 課題設定

虐待やDV、近隣とのトラブルなどから、自宅にいられなくなった人の緊急保護、ひきこもりの家族、ヤングケアラーなど家族から離れて休憩する必要のある人などを対象に、福祉施設や病院へつなぐまで、当法人や連携機関の職員が寄り添い支援に当たる。障害者や高齢所を介護・養育している家族が疲弊のストレスを和らげ、息抜きできる場としてレスパイト事業も行う。

⑵成果と事例

＜概要＞

当該シェルターの存在について一般に公表はしていないが、業務上連携している市の関係課や市内の関係機関の職員に対し、必要に応じて個別に情報提供を行った。

また、今年度から受託したひきこもり相談事業において、家族関係が膠着化している継続相談ケースのご家族に対し、必要があればご本人あるいはご家族のシェルター、一人暮らし体験の場として利用できることを情報提供している。

今年度、シェルターの利用実績はないが、次の３ケースで受け入れを検討した。

＜利用検討ケース＞

① 認知症が疑われる高齢男性

2022年　10月14日（金）16時20分頃、法人本部付近で駐車場ドアを開けようとしている高齢男性に職員が声をかけたところ、「この前の道路の車が多いからなんとか役に立てればと思い地主に会ってきた。」と繰り返し話される。

市の障がい事業課、地域包括支援センターに情報共有し、浦安警察署生活安全課から２名が来所。警察署でも保護は可能だが食事の提供ができないとのことで、一時的に当シェルターの利用を提案した。その後、会話の中で氏名と居住地名が判明し、居住地の高齢者福祉所管課に照会したところ身元が判明したため、警察がご家族のもとへ送っていき、利用には至らなかった。

② ひきこもり当事者と同居の妹夫婦

2022年10月末より、妹夫婦から同居する姉（50代女性、以下「ご本人」）のひきこもりについて相談を受けていた。2022年12月６日深夜、ご本人が自室に放火し、妹の夫名義の戸建て住宅が半焼した。ご本人は救急搬送され、入院。妹夫婦にケガはなかったが、自宅が水浸しで生活できる状況になく困っていると、翌朝（12月７日）、妹からひきこもり相談窓口に連絡が入った。

市社会福祉課（ひきこもり相談事業所管課）に報告したのち、制度的救済が難しい場合の策として一時的に当シェルターの利用を提案することとした。

12月7日夕刻、妹に連絡を取ったところ、「今夜から職場が手配してくれたホテルに宿泊できることになった」と確認でき、利用には至らなかった。

③高齢の親に暴力を振るい警察に拘留された発達障がい者

発達障がい者地域活動支援センターを利用する４０代の利用者が自宅で７０代の母親に暴力を振るい警察に保護された。医療保護入院できないとなると自宅に戻される可能性があったが自宅に戻してしまうと再び暴力を振るう懸念があったため、センターとしてはシェルター利用の準備で女性スタッフの手配をした。結果的には医療保護入院となり利用には至らなかった。

<まとめ>

DV、放火、失踪といった具体的ケースに当法人が関わりシェルター利用が検討されたが実際に利用には至らなかったからと言って、この事業の成果がなかったわけではない。このようなケース、特に③における当事者が暴力を振るったり、逆に当事者が暴力を振るわれたりするケースでは警察の介入などがあるが、深刻でないと判断されると医療保護入院にも繋がらず、自宅に戻されてしまうことが往々にある。やや不謹慎な表現になるがこのようなグレーなケースが福祉職にとっては多大な困難さを感じる。自宅に戻してしまうと確実に状況が悪化してしまう場合に、自法人でシェルター機能を持っているかどうか、このことは現場の専門職の大きな安心となり、それ以外の重要な事柄に集中して取り組めるというメリットがある。

レスパイトとしての役割という意味においては、居場所カフェで中学生の当事者たちの支援をしているのと同時並行で、親たちの交流場の場としてこの場所を複数回活用することができた。

4.啓発イベント付き出前相談

(1) 課題設定

潜在化しているひきこもり、困窮者の発掘と情報発信を目的に福祉施設がほとんどない臨海地域にある高洲公民館などで月１回、ひきこもり・発達障害の出前相談の実施、社会福祉法人が障害福祉だけでなく幅広く生活の困りごとの相談に応じることが出来るということを一般市民に分かってもらえるような催し物を実施する。

千葉県障害者文化芸術支援センターのこまちだたまお氏、東京大学先端科学技術研究センターの登嶋健太研究員によるVR体験なども行い、啓発に努める。

(2) 成果と事例

・概要

日時	概要　講師	会場	参加人数
7/10	「白の世界」アートプログラム こまちだたまお氏 (株式会社いろだま/たまあーと創作工房)	発達障がい者等地域活動支援センターミッテ	6名 相談会 1組
8/27	「ミッテ・スマイルーフェス」 NPO スマイルーによるワークショップ	発達障がい者等地域活動支援センターミッテ	102名 大人52名 子供50名 相談2組
9/17 10/1 10/15 10/29	「VRで撮影をしよう!!」 登嶋健太氏(東京大学先端科学技術研究センター)	高洲公民館	各回10名 ※4 回シリーズでメンバーを固定
1/29	「新春落語と舞踊の宴」 桂右女助氏(真打兼梅田うめすけのペンネームで小説家) 艶熟（着付け、作法、踊りなどを学び、浦安で活動しているサークル）	富岡公民館	29名 相談1組

11 月及び 12 月は、それぞれ昭和歌謡ショーと防災講座というテーマでの出前相談を行う予定だった。昭和歌謡ショーについてはコロナ感染防止の観点から会場の使用許可が下りずに中止となった。防災講座については同時期にスタッフがコロナに感染してしまい止む無く中止となった。

5.「こもりズム研究会」による文化創出

(1) 課題設定

ひきこもりを過度にネガティブに見る風潮が本人や家族を追い詰め、隠そうとする心理から潜在化させている。ネガティブな印象を変え、本人や家族をエンパワメンする。ひきこもり、依存症、いじめ被害者らの作品（文章、絵画）には人間や社会に対する繊細な感性が滲んだ独創的な秀作がある。こうした作品を募り、「こもれび文庫」としてネットで紹介し単行本として出版する。

(2) 成果と事例

〈概要〉

令和３年に生まれた子どもは80万人を割り込み少子化に拍車が掛かっているが、児童相談所が対応した虐待は年間20万件を超える。通報には至らない虐待はさらに多いはずである。小中高校生の不登校や退学、自殺は過去最悪の水準を続けている。

2023年４月からこども家庭庁がスタートした。いじめ、虐待などに対する取り組みが一段と強化されることになる。国民の関心を高め、国や自治体だけでなく当事者が声を上げ、地域ぐるみでの取り組みを展開しく必要がある。

こもリズム研究会は前年度に引き続き、WAM 助成を受けて「こもれび文庫」のリリースを行った。いじめ、虐待、家庭内不和などで心に傷を負った大学生ら若者たちの文章作品を note という SNS で発信した。これを読んだ当事者からも投稿が寄せられるなど一定の広がりを見せ始めている。昨年度の WAM 事業で制作した単行本「こもれび文庫」をひきこもりの研修会や講演会などでも紹介し、関係者の間にも認知が進んでいる。

ひきこもり、いじめなどに関する理解を広げるだけでなく、当事者の内面世界を文章作品に昇華し、文化としての魅力を追求していきたいと考えている。ひきこもりという現象をネガティブに見るだけでなく、繊細な若者たちの感性を文化や芸術の分野で花開かせることを一つの目標に置いている。

当事者の自己肯定感を高め、回復や自立に向けた土台を作ること、繊細な若者たちが生きやすい社会に変えていくことを「こもリズム研究」は目指している。

〈取り組み内容〉

いじめ、虐待などの傷は子どもの心に深く刻まれ、成人に至っても引きずっている人は少なくない。そうした若者たちが表現する文章には家族や大人に対する切なくて悲しい思いが詰まっている。

ひきこもっている人たちの内面世界を多くの人に知ってもらい、ひきこもっている人にも同じような思いを抱いている人の文章を届けようという目的で令和３年度から始めた「こもれび文庫」は、令和４年度にも計25人の作者の計34作品を SNS でリリースした。前年度に引き続き、紙媒体での書籍化も行った。今回は父親からの暴力や暴言に苦しむ若者たちの作品が多かったことから、「父よ」とメインのタイトルを付けた。

ひきこもり、いじめ、依存症といった経験を持つ本人や家族は、社会の無理解やたんにネガティブな視線によって、SOS を発信したり、体験を共有したりする機会が少なく孤立してしまう。こうした現状を改善する一つの方策として、上に挙げたような経験を持つ人々の文章作品を、ネットを通じて広く紹介し、多く

の人々に関心を持ってもらうことを目標に置いた。

◆令和４年度に掲載した作品名は以下の通り。
好きな人／声／なぜ人を殺してはいけないか／私／死神／ある計画
ふでばこ／教え子
涙／父／2030 年のわたし／新月のように／家族／約束／目覚まし時計
冬の前に
秋／普通の家族／閉鎖病棟と大切な仲間／わたしの家族１～５
向き合って母になりたくて／こもれびの窓から１～４
やさしさで傷を愛せるか／僕は穴だらけ
僕だから／先生の言葉／ひのたにの森から 10～12

６．学生ボランティア・スタッフ育成

(1) 課題設定

ひきこもりや複合的困窮者の相談やアウトリーチができる人材の確保と養成のために、大学生を中心に養成講座を開催する。認知症、発達障害、ひきこもり、依存症などの実情と基本的知識を知り、支援スタッフとして活動できるよう実践的スキルの獲得を図る。東京大学、上智大学、千葉大学、植草学園大学、和洋女子大学などの学生たちに参加を求める。座学と実践によりひきこもりや発達障害の人を支援できるように育成する。

(2) 成果と事例

・概要
研修会を計５回実施し、延べ 124 名の参加となった。研修会は下記の通りです。

・研修会
第３回　「発達障害の理解と支援」
2022 年 11 月 3 日㈮ 参加者 42 名
講師：福岡寿氏(日本相談支援専門員協会顧問)

当法人の現場の福祉サービスで課題となっている発達障害者支援を深めるために、福岡氏に講師を依頼。講義ではライフステージごとの支援の課題について講義をしてもらう。

第2回　「障害者が働くって、どういう事？～地域に貢献できて、楽しくて本人も稼げる仕組みを考える～」

2022年11月15日㈫参加者39名

講師：関原深氏（株式会社インサイト代表取締役）

関原氏は就労継続支援事業所や企業をサポートし障害者の働く場を作るために全国を飛び回っていて、就労継続支援の国の評価基準にも関わっている講師。前半の講義を受けて、後半のグループワークでは浦安市で障害者がどんな仕事に就いて生き生き働けるか活発な議論がされた。

第3回　「メンタルトレーニングで仕事に取り組む」

2022年11月28日㈪、29日㈫　参加者30名

講師：加藤史子（メンタルトレーナー）

加藤氏は大学院で心理学を学び、独自のプログラムを開発し全国の企業や教育機関でメンタルヘルスやモチベーションコントロールの研修を行っている。福祉の仕事は「感情労働」と言われ、精神的な負荷が大きいことが特徴である。今研修では心のメカニズムを学ぶと共に、日頃どのような事柄に配慮することが効果的なのか、その思考法を学び、グループワークで自分の傾向を深く知る機会を提供してもらった。

第4回　「これからの社会と若者の生き方」

2022年12月16日㈮参加者13名

御代田太一氏（社会福祉法人グロー支援員）

御代田氏は東京大学教養学部卒業後、滋賀県の社会福祉法人グローに就職。ホームレスや刑務所出所者を受け止める最後のセーフティネットである救護施設にて生活支援員として従事したのち、現在は法人事務局で、企画や人事、現場へのICT導入、芸術活動の支援などに取り組んでいる。28歳の御代田氏が学生時代にはじめて障害者と出会い福祉に触れ、その後実際の福祉の世界に飛び込み歩んできた道、これから目指すものを学生と20代の若手スタッフに語ってくれた。

第４．今年度成果に対する自己評価及び今後の課題

１．自己評価

(1) 困窮者の居場所カフェ

コロナ禍で市民団体、ボランティアの方たちが活動場所が制限されている中、居場所カフェに注目してくれて活発な意見交換の場となった。居場所としての成果は、既存の福祉サービスの利用が難しかった中学生が利用できたことが大きい。就労の場所としては、飲食関係の練習の場として想定していたがコロナの影響で食物を扱うことが難しかった。

今後は教育関係者とのタイムリーな連携の構築を目指していきたいが、一方ではこども食堂と当法人の繋がりは今事業でも深まっており、この関係性を軸に地域の子供たちに必要なサービス、あるいは居場所を提供できるように居場所カフェ「リープ」は法人独自の事業として活用していきたい。また昨年度から受託している「浦安市就労準備支援・ひきこもり相談事業」、そして令和５年度４月から千葉県より受託した市川圏域の中核生活支援センター事業（名称「がじゅまる」）の当法人事業においてもリープを活用していくこととしたい。

(2) アウトリーチ・伴走型支援

アウトリーチ・伴走型支援については、既存の福祉サービスでは対応しきれなかった複数の方を中心に対応した。令和４年４月より当法人が新たに受託した浦安市ひきこもり相談であるが、当法人が引き継いだ際には約３０ケースでそのほとんどが安定した状態だったので当事者からの営業日以外の問い合わせは少なかった。主に新規の家族から、あるいは関係機関からの問い合わせに対応した。

伴走型支援に関しては、当法人の委託事業である浦安市発達障がい者等地域活動支援センターミッテを拠点とした時間外・本体業務以外の利用が多かった。今年度は今事業以外で伴走型支援構築のために職員一名を市川浦安圏域の中核地域生活支援センター「がじゅまる」に出向させ、その運営に学ぶ機会とした。このような取り組みが功を奏して令和 5 年度当法人が中核生活支援センター事業を受託することが可能となった。

(3) シェルター（緊急避難場所）とレスパイト事業

当法人が運営する発達障害者等地域活動支援センターとひきこもり相談で対応しているケースにおいて、緊急時（警察介入）に夜間を過ごす場所がないケー

スが複数回あり、その都度受け入れ態勢を整えたが、警察からの医療保護入院等で実際にシェルター利用の実績はなかった。レスパイトにおいては、中学生の発達障がい者を居場所やアウトリーチで支援している間、母親たちに息抜きの場として利用してもらった。

シェルターについては実際の利用には繋がらなかったが、現場においては緊急時に使用できるシェルターを自法人で運営できる環境を整えたということは非常に安心感が大きかった。レスパイトにおいては、当初はヤングケアラーの学生を対象者に想定していた。元々当法人が繋がっていた教育機関と意見交換を行い、ヤングケアラーの存在を確認するも個人情報取扱の観点から個別に情報提供を受けることは出来なかったので、居場所カフェの部分においても触れたがこども食堂と当法人の連携で子供への支援を積み重ねていき、その実績を教育関係者に周知していくことで信頼関係を築いていくこととしたい。

(4) 啓発イベント付き出前相談

コロナの影響で予定していた昭和歌謡ショーと防災講座が中止になってしまったが、他の回においては感染症対策を講じた上で実施することが可能となった。福祉施設がないマンション群の高洲地区においては、社会福祉協議会の協力を得て高齢層向けの VR 撮影会を 4 回シリーズで企画した。定年退職後の男性 3 名が参加してくれた。この取り組みは撮影した素材を編集して特別養護漏示ホームにおいて高齢利用者向けの「VR 体験会」を開催することを目標としていたのだがコロナの影響でそれはかなわなかったことは非常に残念であり、令和 5 年度には法人の独自事業として実施したいと考えている。

市民団体 NPO スマイルーとの共催で 8 月に実施たイベントは 102 名の来場者を集め大盛況であった。社会福祉法人単独で行うイベントよりも、市民団体と連携することの重要性を深く学ぶことが出来た。

富岡公民館で開催した新春落語会では、前座として地域で和のこと（舞踊、着付け、お花）等を学ぶ市民団体に舞踊を披露してもらった。この団体が舞台に立つのは初めてだったのだが、参加者にはとても好評で、この地域の集合住宅の自治会の役員をしている方から是非自治会の催し物に出演してほしいという依頼があった。この種のイベントは単発で終わるのではなく、次につながる何らかの関係性を築くことが大切であるということを再認識した。

<各相談会・イベントについて　各回アンケート結果>

◆第 1 回アートプログラム

日時：2022 年 7 月 10 日 13:00~15:00

場所：浦安市発達障がい者等地域活動支援センターミッテ

参加者数：６名
講師：こまちだたまお氏（たまあーと創作工房代表・千葉県障害者芸術文化支援センターうみのもりセンター長）

<出前相談会の概要>
「白の世界」と題し、木の板に様々な形の木片を貼り付けて白く塗るワークショップを開催。同時にミッテの相談員が参加者からの相談に対応した。

<会の様子>
発達障がいのある中学生とその母親が参加し、子どもが創作に熱中する傍らで相談員が母親から中学生当事者の居場所などについて相談を受けた。
その他の参加者も思い思いに木片を組み合わせ、個性的な作品をつくりあげていた。

アンケート回収数３枚、うち１枚は親子２名による回答

1. 今日のイベントはいかがでしたか
   楽しかった・・・2
   まあまあ楽しかった・・・1
   どちらでもない・・・0
   あまり楽しくなかった・・・0
   楽しくなかった・・・0

2. 次回のイベントにも参加したいと思いますか
   とてもそう思う・・・2
   まあまあそう思う・・・1
   どちらでもない・・・0
   あまり思わない・・・0
   思わない・・・0

3. このイベントに参加された理由を教えてください（一人３つまで回答）

楽しそうだったから・・・2
アートが好きだから・・・2
ほかに用事がなかったから・・・1
職員に誘われたから・・・1
知り合いが参加するから・・・0
こまちだ先生のワークショップだったから・・・1
以前もイベント付き出前相談に参加したことがあるから・・・0

4. 困ったときに、身近に相談できる人はいますか（いる場合は、その人の属性を回答）
いない・・・2
いる・・・1（属性：家族、友人）

5. 今後、開催してほしいワークショップ（自由記述）
・プログラミング講座（ビジュアルプログラミングでも可）、ミニコンピュータ作成
・音楽・工作・絵画・調理

6. その他、意見や感想（自由記述）
・とても自由に、ほめてもらいながらやらせていただいたので、達成感や自己肯定感が高まったと思います。これを無料で体験できるのはすばらしいです。学校の支援級などにお知らせを配布すればもっと多く集まるのではないでしょうか。

7-1. 年齢
10代・・・2
20代・・・1
40代・・・1

7-2. 性別
男性・・・3
女性・・・1

7-3. 参加回数
今回が初めて・・・2
2回目・・・1
3回目・・・1
4回以上・・・0

<まとめ>
今後ミッテの利用につながる可能性のある発達障がい当事者に対し居場所と体

験を提供すると共に、家族に向けて相談対応や情報提供を実施することができた。
今後、より広報の仕方を工夫し多くの参加者を集められるようにしたい。

◆第２回ミッテ×スマイルーフェス
日時：2022 年 8 月 27 日　11:00~15:00
場所：浦安市発達障がい者等地域活動支援センターミッテ
参加者数：102 名（大人 52 名、子ども 50 名）
協力：多世代交流 NPO　スマイルー

<出前相談会の概要>
ミッテ利用者企画及び協力団体によるワークショップ等を実施。同時にミッテ職員による相談ブースも設ける。

<会の様子>
全体を通じ、多くの親子連れで賑わった。
当事者（発達障害を持つ子供の親）から福祉サービス全般について知りたいとのことで、発達センターのセンター長が説明を行った。また当事者ではないがひきこもり支援に関心を寄せている参加者も１名おり、スタッフから説明を行った。

＜参加者アンケート＞
アンケート回収数 38 枚

7. 今日のイベントはいかがでしたか [有効回答者数 38 名]
   楽しかった・・・34 (89.5%)
   まあまあ楽しかった・・・4 (10.5%)
   どちらでもない・・・0
   あまり楽しくなかった・・・0
   楽しくなかった・・・1 (2.6%)
   *1 件複数回答あり

8. 次回のイベントにも参加したいと思いますか [有効回答者数 38 名]
   とてもそう思う・・・31 (81.6%)
   まあまあそう思う・・・6 (15.8%)
   どちらでもない・・・0
   あまり思わない・・・0
   思わない・・・1 (2.6%)

9. このイベントに参加された理由を教えてください (複数回答) [有効回答者数 38 名]
   楽しそうだったから・・・30 (78.9%)
   知り合いが参加するから・・・15 (39.5%)
   地域で活動する団体のワークショップだったから・・・7 (18.4%)
   人が集まるイベントが好きだから・・・6 (15.8%)
   ほかに用事がなかったから・・・1 (2.6%)
   職員に誘われたから・・・1 (2.6%)

以前もイベント付き出前相談に参加したことがあるから・・・1 (2.6%)
相談したいことがあったから・・・0
その他・・・1 (2.6%)
＊その他：子どもが行きたいと言ったから

10. 困ったときに、身近に相談できる人はいますか　[有効回答者数 37 名]
いる・・・36 (97.3%)
いない・・・1 (2.7%)

「いる」場合、該当する人は誰ですか [有効回答者数 35 名]
家族・・・31 (88.6%)
友人・・・21 (60.0%)
ご近所・・・5 (14.3%)
施設職員・・・4 (11.4%)
市役所・・・2 (5.7%)
その他・・・3 (8.6%)
＊その他：学校の先生、病院の先生/先生/無回答

11. このイベントはどのように知りましたか　（複数回答）[有効回答者数 36 名]
学校で配られたチラシ・・・15 (41.7%)
知人・友達から・・・12 (33.3%)
ミッテの職員から・・・3 (8.3%)
ホームページ・・・2 (5.6%)
玄関ポストに入っていたチラシ・・・0
回覧板・・・0
その他・・・5 (13.9%)
＊その他：インスタグラム/広報/facebook/パティオに来たときに見た/無回答

12. 今後、開催してほしいワークショップ（自由記述）
・アクセサリー作り（3 件）
・ネイルアート（3 件）
・クッキー、その他スイーツの販売
・幼児向けのものもお願いします
・大人向けのもの

13.その他、意見や感想（自由記述）

・子どもがとっても楽しんで参加していました。またいろいろ作ってみたいです

・いろいろなワークショップがあって楽しかったです

・また年に何回かあればうれしいです

8-1. 年齢　[全体：39 名]

10 代未満・・・6 (15.4%)
10 代・・・5 (12.8%)
20 代・・・2 (5.1%)
30 代・・・9 (23.1%)
40 代・・・13 (33.3%)
50 代・・・2 (5.1%)
60 代・・・2 (5.1%)
70 代以上・・・0

＊親子で来場し、親のみアンケートを記入しているケースが多いため上記のような年齢分布になっていると考えられる
子の年齢は小学生が多いと思われる

8-2. 性別　[全体：30 名]

男性・・・3 (10.0%)
女性・・・27 (90.0%)

8-3. 参加回数

今回が初めて・・・32 (91.4%)
2 回目・・・1 (2.9%)
3 回目・・・0
4 回以上・・・2 (5.7%)

<まとめ>

小学校にチラシを配ったことや、ワークショップの内容から来場者の多くは小学生の子どもとその親であった。アンケートの結果を見てもイベントを知ったきっかけは「学校で配られたチラシ」が最多となっている。次いで「知人・友達から」が多くなっており親子のネットワークの強さも推察される。

小学生はアプローチがしやすいことに加え、今後困りごとが顕在化する可能

性がある中で早期に支援機関を知っていただくことには大きな意義がある。今後も地域の団体と協力しながら小学生の参加を促すようなイベントを展開していきたい。

一方で、アンケートでイベントに来場した理由として「相談したいことがあったから」との回答は0であった。「困ったときに相談できる相手がいるか」という設問に対しても大半が「いる」と回答し、家族・友人・学校の先生等に相談ができている参加者がほとんどであった。現時点で困りごとを抱え、誰にも相談できない状態にある方へのアプローチは依然として難しいことが明らかとなった。また、本筋とはずれるが今回特徴的な結果としてアンケート回答者の 9 割が女性であった。これは母親が一人で子どもを連れてくる、あるいは両親で来場するもののアンケートに回答するのは母親というケースが多かったためであると考えられる。子育てにおいて母親主導の状況が依然根強いことが伺える。

◆第３～６回「VR で撮影をしよう‼」
日時：2022 年 9 月 17 日 13:00~15:00
　　2022 年 10 月 1 日 13:00~15:00
　　2022 年 10 月 15 日 13:00~15:00
　　2022 年 10 月 29 日 13:00~15:00
場所：高洲公民館
参加者数：各回 10 名
講師：登嶋健太氏（東京大学先端科学技術研究センター）

高洲公民館で開催した今イベントは浦安市社会福祉協議会の協力を得て開催した。この地域はマンション群が多く、約 30 年前に開発された時期に入居した世帯は子供が独立して高齢の夫婦世帯で夫が定年退職している世帯が多いということを社会福祉協議会との意見交換で前年度にきいていた。そのような地域特性を鑑みてイベントの内容を検討した結果、東京都内でアクティブシニアを対象にしたサークル活動に取り組んでいる登嶋健太氏を招くこととし、イベントの内容は単発ではなく、4 回シリーズで開催することとした。

4 回シリーズで市内各所を撮影を 360 度カメラで立体的に撮影し、成果発表の場として市内の特別養護老人ホームで高齢利用者向けに VR 体験会を開催する予定であったが、コロナのため開催は中止となってしまったことが非常に残念で会った。

＜参加者アンケート＞

Q1.VR 素材づくりワークショップに参加しようと思った動機はなんですか？（複数回答可）

1	チラシを見て興味を持ったから	2
2	写真や動画を撮るのが趣味だから	2
3	友人・知人に誘われたから	7
4	VR に関心があったから	3
5	その他（自由記載）	0
6	無回答	0

【自由記載コメント】

・今回初めて参加。最初から参加できなくて残念でした。

Q2.VR 素材づくりワークショップに参加してみて、今のあなたの気持ちに近いものをお選びください。（複数回答可）

1	360°カメラを購入して撮影を続けたい	1
2	画像編集を学んでみたい	3
3	VR のことを自分でもっと勉強したい	1
4	VR の映像をもっと見てみたい	6
5	その他（自由記載）	3
6	無回答	0

【自由記載コメント】

・お手頃な価格になったら自分でも楽しんでみたい。

・利用方法が不明。

・家族に介護が必要な人がいるので活用したい。様々な活用方法にも興味がある。

Q3.VR 素材づくりワークショップの回数は妥当でしたか？

1	ちょうどよい	8
2	もっと少なくてよい	0
3	もっと多い方がよい	0
4	無回答	2

Q4.VR 素材づくりワークショップに参加してどうでしたか？

1	楽しかった	7
2	まあまあ楽しかった	3
3	どちらでもない	0
4	あまり楽しくなかった	0
5	楽しくなかった	0
6	無回答	0

【上記を選んだ理由】

・VR についての知識が全くなかったので素材によっては色々な活用の仕方があることを知り興味深かった。
・初めてのことを体験できてよかった。
・VR の環境と現状が見えて学びになりました。
・普段の目線と違った角度、高さが新鮮であった。
・女性が多いのでビックリ。

Q5.VR 素材づくりワークショップの続編があったら参加したいと思いますか？

1	とてもそう思う	3
2	まあまあ思う	3
3	どちらでもない	1
4	あまり思わない	1
5	思わない	0
6	無回答	2

【上記を選んだ理由】

・つくるより見る方が嬉しい。
・つくる方より、行ったことない所、未体験のことをこれを通して体験したい
・お楽しみのお散歩会よりもう少し専門性のある取り組みに期待します。
・カメラを買うか深く検討中です。
・撮った画像を人に見せる為の編集の仕方やひとつの画像をどのくらいの長さで撮ると見る人がわかりやすいのかなど思いました。自分が映らないような角

度とか高さとかもう少し知れたら良いかと思いました。

Q6.VR 以外で講座等に参加してみたいと思うテーマがあれば教えてください。
【自由記載コメント】回答数３
・海外の街並み、神社・仏閣の中を見て回る
・地域にお住いの外国の方との交流会
・高齢者の方の介護の勉強会のようなもの。心得、情報交換、介護体験会（歩きにくさ、見にくさ、重りをつけて歩くなど。）

Q7.高洲地区に必要と思われる社会資源はなんですか？
【自由記載コメント】回答数１
・町中華のような生活と近い飲食店

Q8.困ったときに身近に相談できる人はいますか？

1	いる	7
2	いない	0
3	無回答	3

Q9.相談できる方はどのような方ですか？
【自由記載コメント】回答数５
・ケアマネ
・ご近所、趣味の仲間
・家族や自治会の仲間
・自治会役員
・家族、福祉関係、ケアマネージャーなど

Q10.あなたの性別と年代を教えてください。
【性別】

1	男性	3
2	女性	4
3	無回答	3

【年代】

1	30 代以下	0
2	40 代	0
3	50 代	2
4	60 代	2

5	70 代	1
6	80 代以上	1
7	無回答	4

◆第 7 回「新春落語と舞踊の宴」
日時：2023 年 1 月 29 日 13:30~15:00
場所：浦安市富岡公民館　第 1 ・第 2 会議室
参加者数：29 名
ゲスト：桂右女助氏（落語家）
　　月イチワノコト艶熟（市民サークル）

<出前相談会の概要>
市民サークルによる舞踊の披露と桂右女助氏による落語を実施。同時に参加者からの相談も受け付ける。

<会の様子>
イベントの内容柄、参加者の年齢層が高かった。桂右女助氏は落語の演目に加え異色の経歴を持つ自身の半生を語り会場を沸かせていた。

＜参加者アンケート＞
アンケート回収数 19 枚
1 今日のイベントはいかがでしたか
　楽しかった・・・16 (84.2%)
　まあまあ楽しかった・・・3(15.8%)
　どちらでもない・・・0

あまり楽しくなかった・・・0
楽しくなかった・・・0

2 次回のイベントにも参加したいと思いますか
とてもそう思う・・・14 (73.7%)
まあまあそう思う・・・4 (21.1%)
どちらでもない・・・1 (5.3%)
あまり思わない・・・0
思わない・・・0

3 このイベントに参加された理由を教えてください（複数回答）
楽しそうだったから・・・13(68.4%)
落語が好きだから・・・10(52.6%)
知り合いが参加するから・・・8 (42.1%)
職員に誘われたから・・・2 (10.5%)

舞踊が好きだから・・・2(10.5%)
相談したいことがあったから・・・1 (5.3%)
以前もイベント付き出前相談に参加したことがあるから・・・0
その他・・・0

4 困ったときに、身近に相談できる人はいますか
いる・・・19(100%)
いない・・・0

「いる」場合、該当する人は誰ですか
家族・・・14 (73.7%)
友人・・・9 (47.4%)
施設職員・・・4 (21.1%)
ご近所・・・2 (10.5%)
市役所・・・1(5.3%)
その他・・・1(5.3%)
無回答・・・1(5.3%)

＊その他：専門家

5 このイベントはどのように知りましたか　（複数回答）

知人・友達から・・・9 (47.4%)
チラシを見て・・・8 (42.1%)
コミュニティ紙のお知らせを見て・・・2 (10.5%)
千楽の職員から・・・1 (5.3%)
施設職員から・・・0

6 今後、開催してほしいワークショップ（自由記述）
・千葉県で活躍している人の特徴の有るワークショップ
・老若男女、外国人、障害ある方など、どの人も楽しめるもの
・クラシックギターのコンサート
・歌

7 その他、意見や感想（自由記述）
・浦安市 UIFA（国際交流協会）の会員　還暦過ぎて今迄の様々な体験を活かして地球に楽しませてもらった恩返しで地域活性化の活動をしています
・落語も舞踊も楽しかったです
・誘われて参加しましたが、とても楽しかったです。支援についても知りたいと思いました。
・落語はこんな機会がなければきくことがないので楽しかった。自分の人生をあけっぴろげに話せる人がこの世の中にいることがふしぎでありました

8-1. 年齢
10 代未満~30 代・・・0
40 代・・・3 (15.8%)
50 代・・・4(21.1%)
60 代・・・3(15.8%)
70 代以上・・・6(31.6%)

8-2. 性別
男性・・・3 (15.8%)
女性・・・14(73.7%)
その他・・・1(5.3%)
無回答・・・1(5.3%)

8-3. 参加回数
今回が初めて・・・17 (89.5%)
2 回目・・・1 (5.3%)
3 回目、4 回以上・・・0
無回答・・・1 (5.3%)

<まとめ>
今回もチラシを見て参加された方が 4 割以上を占め、チラシの広報効果がうかがえる結果となった。イベント参加理由も「落語が好きだから」という回答が半数以上の回答者から得られ、内容の魅力も十分であったと言える。
自由記述欄では「地域活性化の活動をしている」という記述も見られた。このように今回も地域で活動する人びとに関心を持っていただくことができたのは大きな成果である。

(5) 「こもリズム研究会」による文化創出

固定の読者層を獲得することにはある程度の成果を得たが、さらに一般へ広めるまでには至っていない。内容が似通っているため既視感がある、現実にひきこもっている人からすれば比較的恵まれている筆者による作品が多い、メッセージ性が弱いなどが普遍化に限界のある原因と考えられる。

ただ、こもれび文庫を読んだ若者から自分の作品を投稿するといったこともあり、継続をしていくことの意義を改めて痛感させられた。

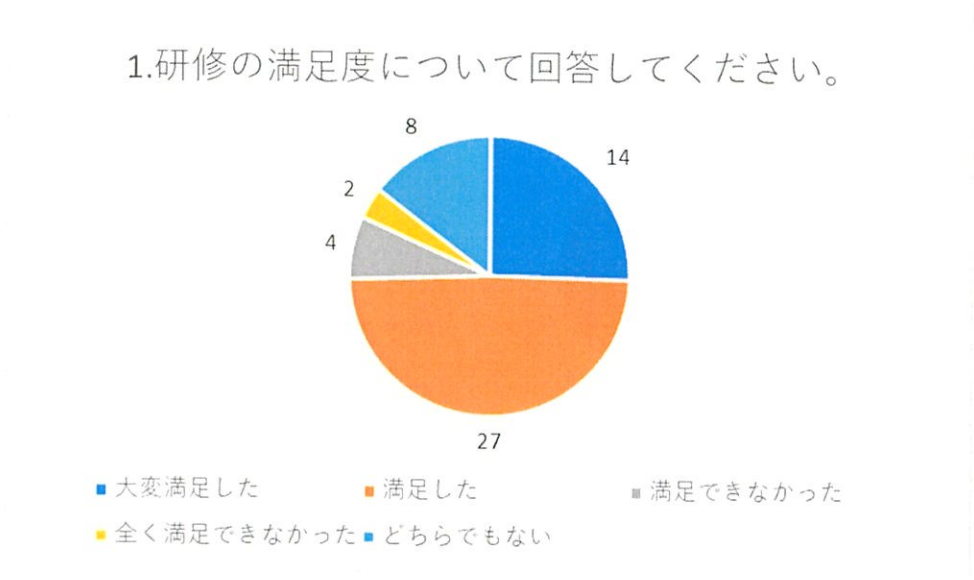
これまでは SNS での発信が中心だったが、こもリズム研究会のホームページを全面的に作り直し、より魅力のある情報発信に努めている。デザインは前年度の単行本の装丁を依頼した細山田デザイン事務所（東京・渋谷区）が担当した。すっきりとして親しみやすいデザインとしたことで、今後は HP でも掲載作品のアーカイブ化を進めていく方針である。

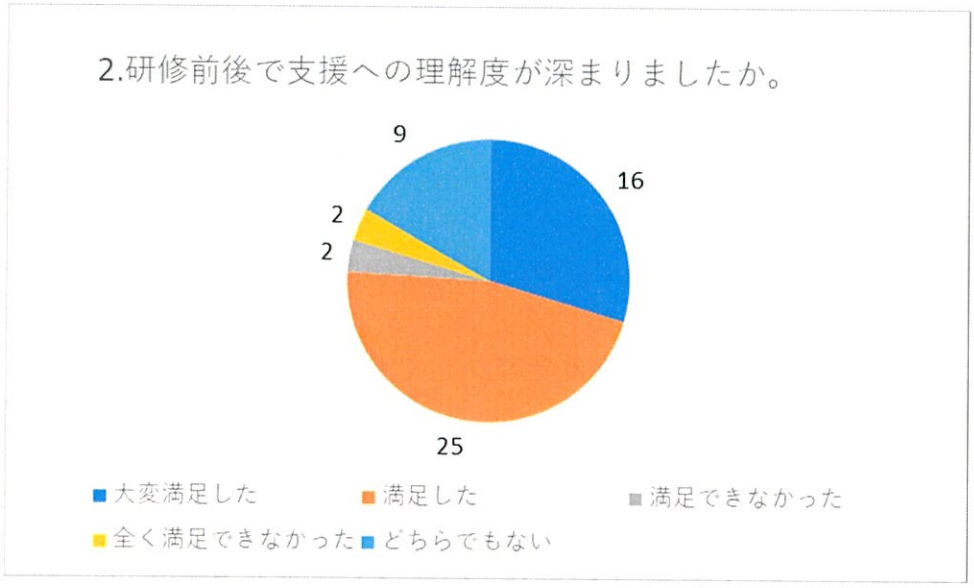
(6) 人材育成

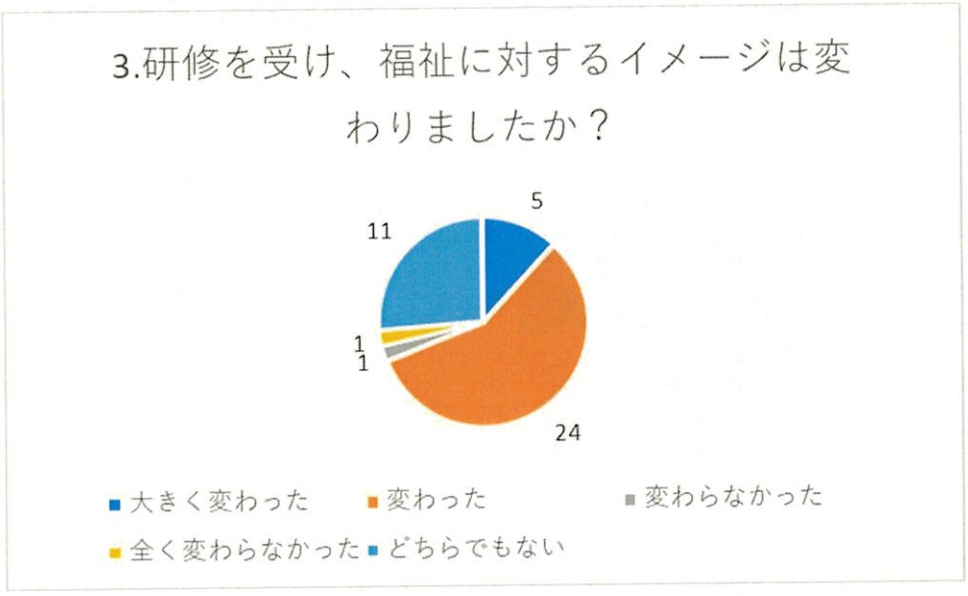
発達障がい、障害者の就労、働く職員のメンタルについて、若手職員は福祉で何を目指すかというテーマで研修を提供することが出来た。コロナ禍ではあったが、「発達障がい」はオンラインでの実施となったが、他の 3 種類の研修は対面で実施することができて非常に有意義だった。

それぞれの研修のアンケート結果は以下の通りである。

◆「発達障害の理解と支援」　講師：福岡寿氏(日本相談支援専門員協会顧問)



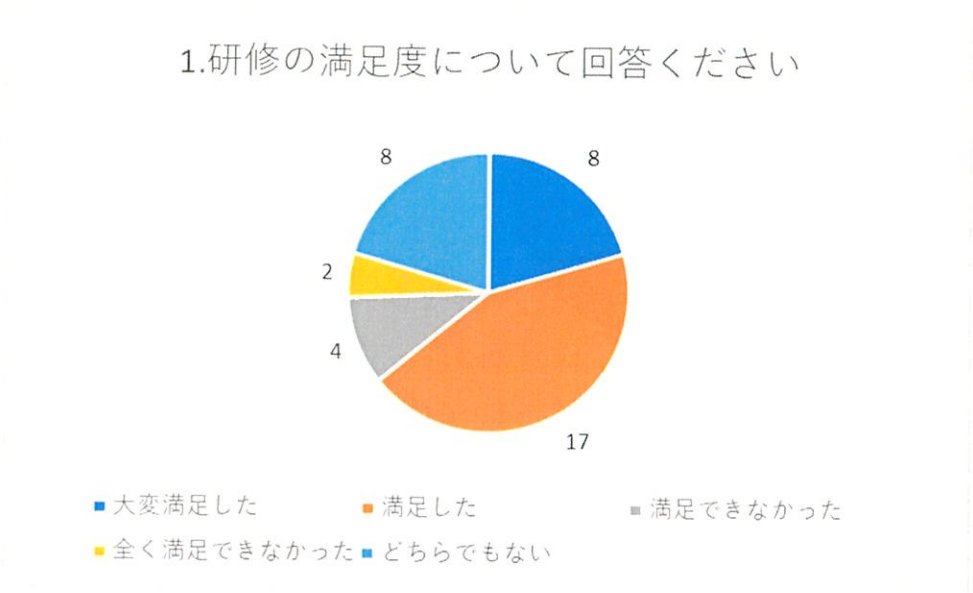


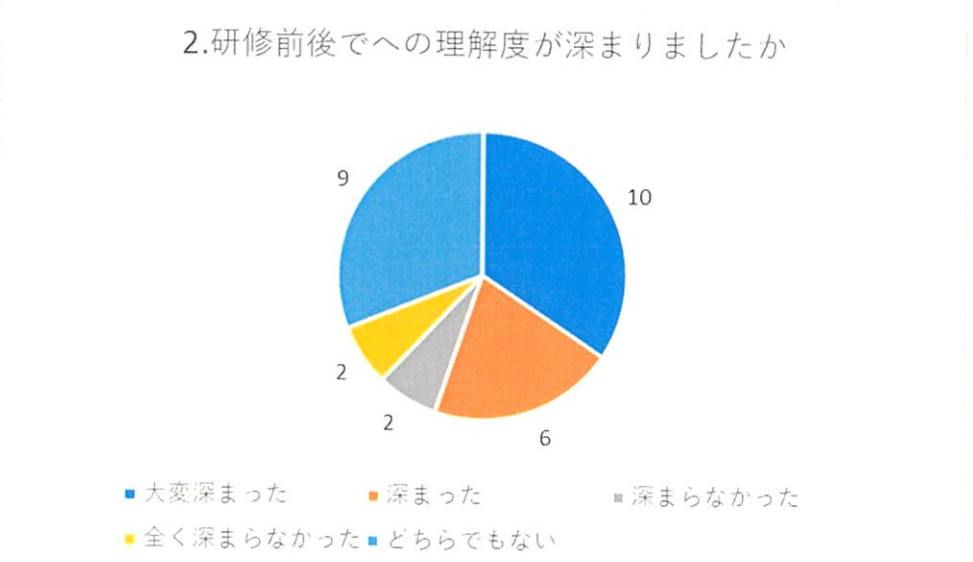


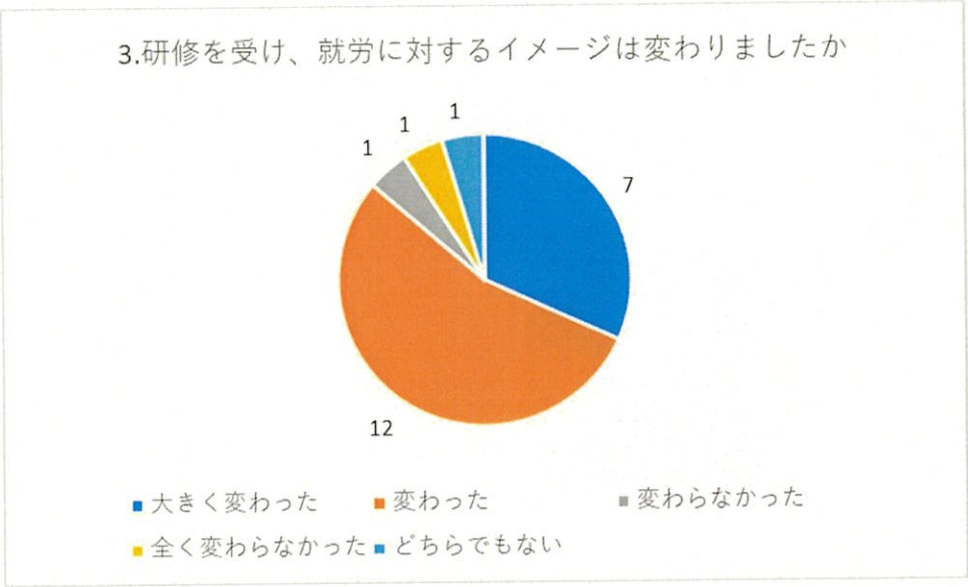
自由意見

・「発達特性」があっても不適応を起こさなければ「発達障害」にはならないというお話が印象的でした。
・これまで幼児を対象にした支援経験が乏しいため、新たな視点を得ることができた。
・幼少期からの影響は大きいと感じた。
・これからはグレーゾーンの人へのアプローチが大切になってくるなと思いました。
・小さい頃から周りの理解があれば障害受容なしでも自分らしく生きていけるのかなと思いました。

◆「障害者が働くって、どういう事？～地域に貢献できて　楽しくて本人も稼げる仕組みを考える」　講師：関原深氏（株式会社インサイト代表取締役）





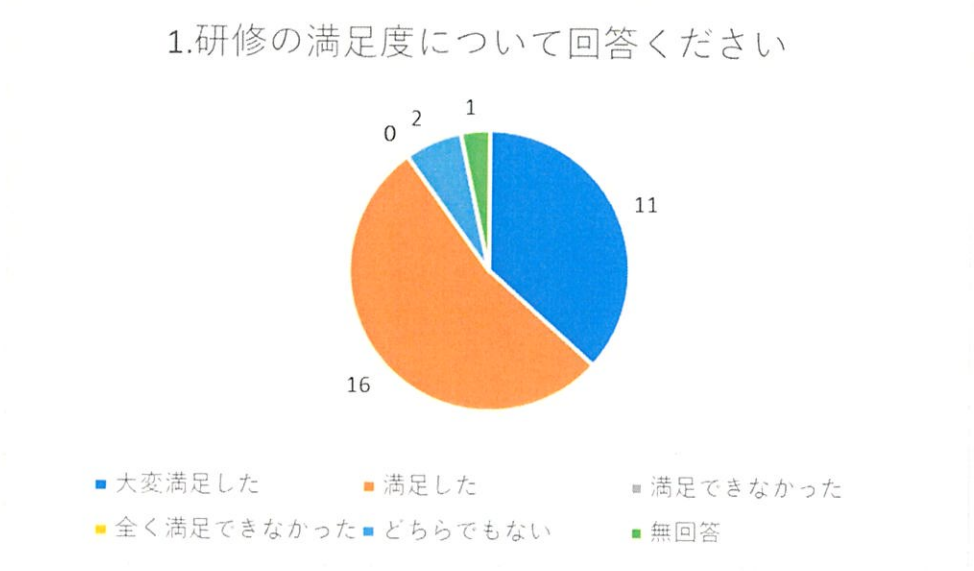


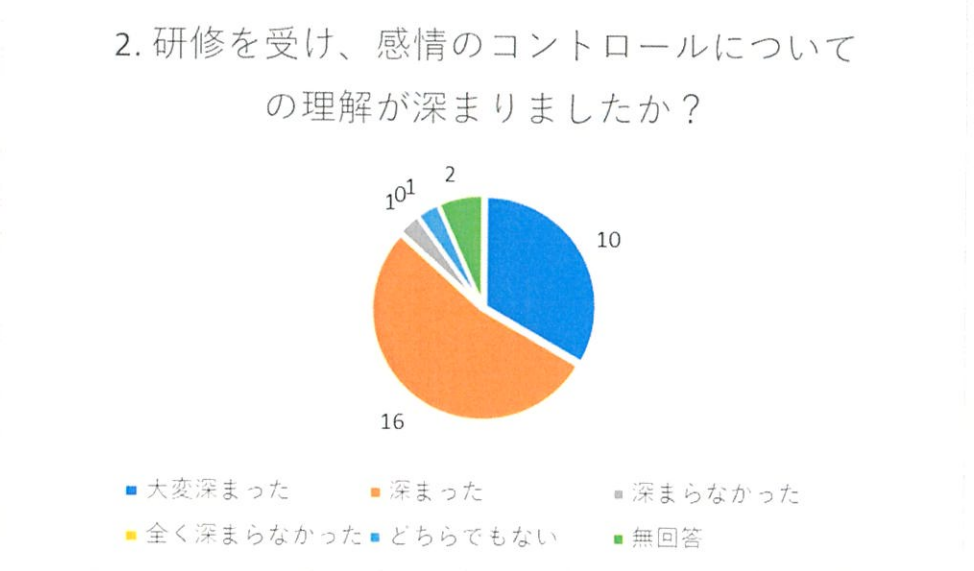
自由意見

・就労に関しては、研修前までは全然知識がなかったが、この研修で就労についてなんとなくだが理解できた。

・全国の就労の例からこれからどうすれば良いか、何が課題かを考えるきっかけになった。

◆「メンタルトレーニングで仕事に取り組む」
講師：加藤史子（メンタルトレーナー）



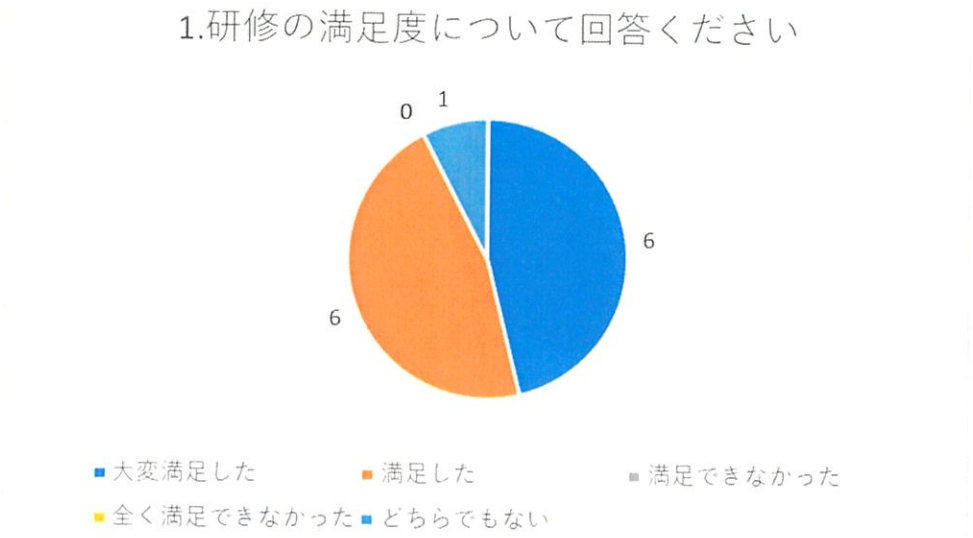


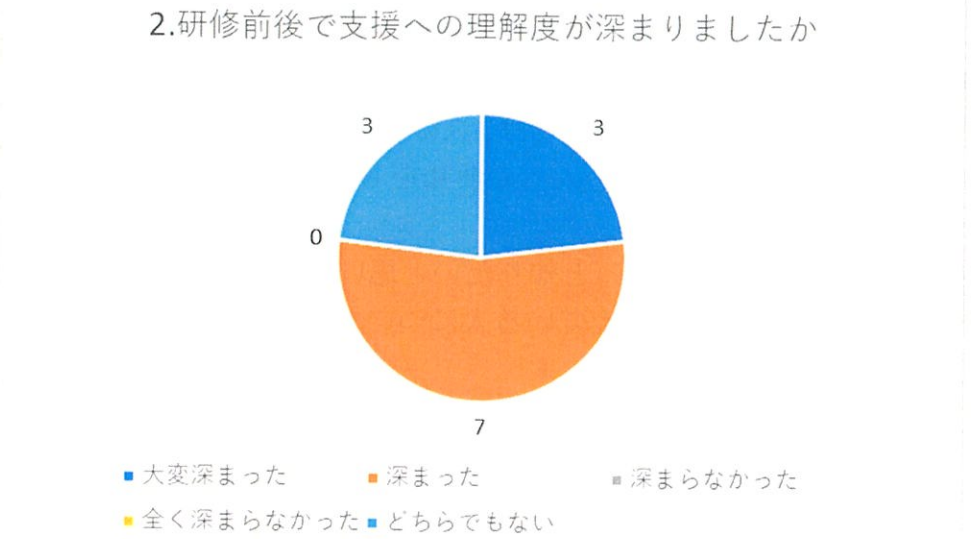
自由意見

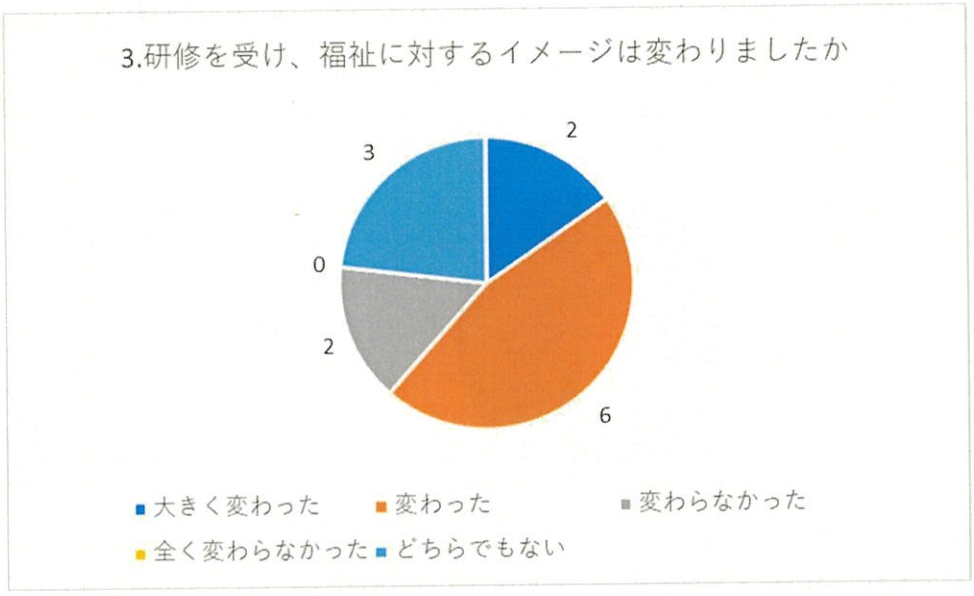
・自分を自分でコントロールできるようになると利用者に対して、今以上に落ち着いて対応できるかなと思いました。
・今後も支援や人間関係に役立てたいと思いました。
・感情にふりまわされるのではなく、感情を上手に使っていきたいと思いました。

・先生のように教える立場がどうしたらいいのか知りたいです。自分も先生のようなこと伝える技術と資格がほしいと思いました。
・自分がこれからどうすれば良いか、何が課題かを考えるきっかけになった。

◆　「これからの社会と若者の生き方」御代田太一氏（社会福祉法人グロー）







自由意見

・福祉に真っ直ぐ向き合い、様々な提案や企画等をされている姿勢に感銘を受けました。

・日常の決まった業務をこなすだけでは、人のこと知ったり、人への興味を満たすことはできないので、私も人への興味をしっかりもっていきたいと思った。

・海外の福祉に関することをもっと知りたいと思いました。又、「救護施設」のような障害以外の困難を抱えている人についても知っていきたいです。

第５．あとがき

「場」の可能性について

新型コロナウィルスの蔓延が長引き、オンラインによる仕事や学びがすっかり当たり前の社会になった。人間関係のわずらわしさから解放される半面、人との出会いやぬくもりが薄れ、孤立感や疎外感に苦しんでいる人が少なからずいる。

少子高齢化が進む時代に、政府は「地域共生」を掲げてコミュニティーの維持や活性化を進めようとしている。誰もが住み慣れた地域社会につながり、何らかの役割を持てるようにする。そんな活動が各地で始まっているが、継続的に取り組んでいくためには「人」「場所」「お金」が必要だ。

高齢者や障害者の支援などの福祉事業を行っている社会福祉法人には地域共生を展開するための条件がそろっている。もともと近隣の人間関係や支え合いの機能が弱い都市部では、自然発生的に地域共生の動きが始まり、それが継続していくことは難しく、人材や必要経費をねん出できる社会福祉法人などへの期待が高い。

社会福祉法人「千楽」が活動している千葉県浦安市は東京都に隣接した都市部にある。行政からの経済的なバックアップには恵まれているが、福祉現場は慢性的な働き手不足に陥っており、地価が高騰していることもあって施設や事業所を運営する場所を確保することに苦労している。

千楽では令和４年度ＷＡＭ助成（社会福祉振興助成事業）で都市部の居場所づくりについて主に取り組んだ。オンラインが進むようになったからこそ、人々が集う「場」の可能性や課題について改めて考える必要がある。

○都市部に特有の問題

昨年生まれてきた子どもの数が 80 万人を割り込むことは大きな衝撃だ。少子高齢化に伴い現役世代の人口減少は予想を超えるスピードで進んでいる。都市部は比較的人口減少が緩やかだが、潜在的な課題は大きい。

浦安市は東京に隣接、4 キロ四方の狭い面積に 17 万人が住む人口過密の街だ。沿岸部の埋立地は分譲マンションが林立し、経済的に恵まれた層が東京などから移住する。快適で清潔で、交通の便が良く道路も広くて整備されている。治安も良く安心や安全を感じられる。何よりも近隣との人間関係のしがらみのない自由さが人気を集めている。

人間関係のしがらみがないのは、逆に住民同士の支え合いがあまりないということを意味する。快適さや安心を求める人が多いためでもあろう、行動障害を起こす知的障害や自閉症の人、近隣とトラブルを起こすことのある精神障害や発達障害の人は肩身の狭い思いで暮らしている。

何か小さなトラブルを起こすと地元にいられなくなって、房総半島や県外の入所施設・精神病院へと送られる。「重度障害者は浦安市で暮らすのは無理」という声が福祉関係者の間でもよく聞かれる。行動障害を起こす人は敬遠され、事業所間で押し付け合いをすることもよくある。当法人も過去においては支援の難しい人の利用を断ったり、利用停止をしたりすることがあった。

しかし、トラブル起こす障害者を追いやって得ている快適さとは何だろうか。それが住民にとっても本当に快適と言えるのだろうか。今は住民の平均年齢は若いが、高齢化は急激な上昇カーブを描いていく。分譲マンションの住人が一斉に高齢化していくためだ。

この1年間で、障害者支援をしている千楽のスタッフが事業所近くの路上で倒れている高齢者、千楽の施設内に迷い込んできた認知症の高齢者を保護するケースが計 4 回あった。福祉の支援や近隣の支え合いが必要なのは障害者だけではないという現実がすでに目の前にやってきている。

2020年に開所した浦安市発達障がい者支援センター・ミッテは発達障害だけでなく、貧困、DV、虐待、認知症や介護疲れ、依存症、性的逸脱、非行、ひきこもりなどが絡まりあったケースが続々と持ち込まれてくる。新型コロナウィルスの蔓延が長引き、家族ごと複合的な困窮状態に陥っている状況が広がっている。

快適で安全でしがらみのない自由の土台が次第に崩れていく。それは浦安市だけでなく、東京や関西圏の再開発エリアが近い将来に直面する問題でもある。地方は高齢化のピークが過ぎようとしており、これからは少子高齢化の深刻な問題は都市部に現れるようになる。障害があっても高齢になっても住み慣れた街で暮らし続けられるために必要なことを考えねばならない。

○地域共生に必要な「場」

子ども・障害・高齢という縦割りの福祉ではなく、各分野横断型で一体的な相談やサービス提供体制を整えていこうというのが地域共生社会の考え方である。また、福祉の支援だけでは手が届かないものに対して、住民同士の支え合い機能を底上げし、これまでは「支えられる側」だった障害者や高齢者も役割を得て「支える側」になっていくことが求められている。

「居場所支援」「参加支援」「伴走型支援」など重層的な支援体制を市町村ごとに築いていくことを国は進めており、地域によってさまざまな実践が展開され

ている。一過性のものに終わらせないためには、小さくてもローカルビジネスを活性化させ、地域住民が継続的に関わることのできる仕組みが必要だ。つまり、事業を支えられる人がおり、住民や参加者が集まることのできる場所があり、そうした活動を続けるためのお金が回るようにしなければ継続的な活動にはならない。

もともと福祉事業を行っている社会福祉法人やＮＰＯ法人にはそうした条件が自ずとそろっており、福祉事業だけでは手が届かない制度のすき間や新しい課題に取り組むことができるはずである。

千楽は正職員約 30 人を中心にパート職などを含めて 100 人近いスタッフが知的障害や発達障害の人の支援に携わっている。千楽が運営する複合施設「まある」にある就労継続支援Ｂ型事業の厨房で弁当やパンなどをつくり、独居高齢者への宅配、困窮家庭の子らが通う県立高校への出前販売を行っている。発達障がい者支援センター「ミッテ」には多くの市民グループが活動の場として関わり、随時イベントを開催している。

「まある」は市有地を無償貸与されたところに千楽が施設を建設したものであり、「ミッテ」は市の建物を借りて事業を行っている。埋立地が市の大半を占めるという浦安市独特の事情として、福祉や地域共生の事業をやる「場」を独自に確保することが難しいということが挙げられる。不動産物件がそもそも少なく、土地や建物の面積が狭い割に賃貸価格も分譲価格も高い。住宅が密集しているため、用途の条件も厳しく制限されている。

2023 年 3 月に発表された国土交通省の公示地価によると、浦安市の地価は千葉県内で最も高いランクにあり、首都圏内の地価上昇率の上位に浦安市内の地域がいくつも名を連ねた。新型コロナウィルスのピークが過ぎ、景気も穏やかな回復に向かう中での地価上昇は、ますます福祉や地域共生を実践する「場」の確保を難しいものにさせている。

○都市生活のオアシス

令和 4 年度 WAM 事業で浦安市消防本部前にある店舗を改装し、不登校の子どもや困窮者が集うことのできる居場所カフェ「リープ」を開設した。もとはカラオケスナックだった場所だ。地下鉄浦安駅と JR 新浦安駅をつなぐ市内の基幹道路から市役所へ向かう角にあり、浦安市のちょうど真ん中に位置している。

周囲は医院と薬局、酒の量販店、ガソリンスタンドがある程度で、住民が憩えるような場所はない。「リープ」は 30 平方メートル程度の小さな場所ではあるが、ストレスから逃れてホッと一息つけるオアシスのような居場所にしようと考えた。できるだけ福祉っぽくはせず、ふつうの喫茶店やバーのような雰囲気にすることも心がけた。不登校の子どもたちや家族、発達障害や知的障害の人、困

窮者などが利用している。映画の鑑賞会なども行っている。

「ミッテ」の運営を始めてから多くの利用者が訪れるようになった。何年も自宅にひきこもっていた人、精神科病院の院内学級にいた子ども、周囲との人間関係につまずき傷ついてきた人たちが多い。会って話を聞いてみるとよく生きていたと思えるケースがある。まるで野戦病院、あるいは海で遭難した人が泳ぎ着いてくる小舟のような感じがする。

ところが、福祉につながって救われた利用者の中には、次第に福祉の支援にはあきたらなくなってくる人がいる。スタッフは一生懸命に支援しているつもりなのだが、事務的な対応のように思われたり、本気で利用者のことを考えていないのではないかと疑心暗鬼になったりする。クレームや暴言をぶつけてくる人もいる。市役所へ苦情を言い募る人もいる。なぜなのだろうか。

「好きな人といちゃいちゃしたいのです」。ある男性利用者はスタッフに語った。孤立し疎外感を抱いている彼らを社会につなぐことを福祉ができたとしても、もとの孤立感や疎外感を癒すことができるのは福祉や医療ではない。彼らが求めているのはもっと私的な関係による充足感や安心感なのかもしれないと思ったものだ。しかし、福祉スタッフは恋人や家族にはなれない。友だちにもなれないかもしれない。そこが彼らをいら立たせているである。

ミッテ開設から 3 年、利用者からの暴力や執拗なクレームでスタッフも傷つき、離職するスタッフも出たりはしているが、最近は利用者同士のピアな関係が生まれるといった新たな現象も見られる。ミッテにつながっている市民グループの活動に参加する利用者もいる。

福祉から卒業することでインフォーマルな人間関係が生まれ、福祉サービスでは得られない充足感や自立生活の楽しみができるのだとしたら、それこそが福祉の目指すべき役割なのかもしれないと思う。

できるだけ福祉の雰囲気のしない喫茶店やバーのような居場所を作りたいと思ったのはそのためだ。不動産物件が乏しく賃貸料も高い都市部ではあるが、快適で楽しく刺激的でストレスも多い中でオアシスのような小さな居場所が重要な役割を果たしていくのである。

社会福祉法人 千楽
野澤和弘（副理事長）